

研究における出会いと楽しむことの大切さ



東京大学大学院工学系研究科

教授 高橋 淳

内容を一任するとの依頼文を真に受け、滅多にない機会なので、放言させて頂きたいと思う。

ずっと思っていること

既に、多くのかたが各所で語っておられることとは思うが、少子化の中、理科離れ、特に物理離れに拍車がかかっている。モノづくりに誇りと生き甲斐を感じて日本の成長を牽引し、後ろ髪を引かれながらも後進に将来の日本を託そうという世代のかたにとっては不安この上ないことであろう。私も非力ながら理系の大学生に社会の安全・安心を支える材料や構造の重要さと、できればその分析の面白さ・奥深さを伝えたいと日々努力してはいるが、最近の学生の志向はマネージャーやコンサルタントであり、特に学年が低いほどその傾向が顕著である。

あまり具体的に書くと苦情が来そうだが、自動車会社や部品製造会社に材料選択のコンサルタントをやっている、技術継承の電子化をテーマに博士論文を書きたいという人の口述試験に立ち会う機会があり、転位論はおろか低温脆性の概念も知らないことに唾然としたこともある。

さて、どうすればよいのか。私は未だ明確な解決案を持ち得ていないが、少なくとも一つだけ心がけているのは、研究を楽しむことで、取り組んで楽しくなる研究対象を追求したり、それを夢中で解く姿を実演することである。つきあわされる学生にとっては、迷惑な話なのかもしれないが・・・。

父の影響

私の父は高校の教師で、一昨年亡くなったが、今思うに、現在の私に大きな影響を与えている。私は世間一般で流行っているものは避けて通る、というよりも疑ってかかる性癖があり、たいいていものは結局何故流行っているかわからずに手を出さない。研究も、その研究の意義を研究するほうが楽しい。山本七平の「常識の非常識」という

本は未だに時々読み返すが、これは父の本棚から失敬したもので、未だに私の判断基準の多くがここから来ているように思う。

また、私の父は相当な博打打ちで、私も小さい頃から逸話を聞かされたり、現場にお供をさせられてきたが、父や父の博打仲間からも、多くのことを教わった。周囲の雑音に惑わされず、自分を信じ、周りと同じことはやらないというのは、この影響に違いなく、たぶん一生そうしていくのだろう。

このように、父の言いつけ（遺伝）を忠実に実行し、私が大学を出てつくばの工業技術院に勤めた頃はちょうどインパクトファクターなど研究者の評価がうるさく言われ始めた頃であったが、その価値が全く理解できないので論文は頼まれないうと書かないし、定常的に書く実験報告的な論文はほとんどすべて後輩が指導していた学生をファーストオーサーとしてきた。こんな業績で良く教授になれたものである。ただし、研究の独創性と面白さだけには自信がある。誰かが真似してくれたら、また別のことを考えるので、常に独創的であり、私は面白いので、ずっと自信があることになる。博打は気持ちで負けたら負けだということで、いつも前向きでいることにしている。これも父の影響であろうと感謝している。

蛇足ながら、父の本棚にあった阿佐田哲也と堺屋太一の大量の著書により、高校時代から将来が方向付けられていたようでもある。ということで、私は大学の学生部屋の本棚や机にどんどん本を置くし、何でも学生に話す。その効果が現れるのは20年後と信じて。

逃げ切り世代？

しかしながら、このようなスタイルが許されてきたのは時代が良かったのかもしれないと思うことも多い（今後も私はスタイルを変える気は無いが）。また、これまでに仕事でかかわってきた人にも事実恵まれてきたと思う。（そういえば、リムコ

